

「世界が私を嫌っても」

作・有吉朝子

登場人物	
本郷 スミ子	作家
常磐 葉子	作家
夏川 薫	作家
島 孝三	スミ子の夫
谷川 誠	小学校教師・スミ子の恩師
桑原 とわ子	スミ子の友人
岡谷 ミツ	スミ子の友人
本郷 八千代	スミ子の母
本郷 源右衛門	スミ子の父
中洲 三吉	村の男
田中 竜介	スミ子の内縁の夫・自称アナキ
スト	
津村 一郎	帝大生、後の葉子の夫
梨木 哲也	新聞記者
堀田 ゆり	編集者
立花 芳雄	医者
大野 すみ江	看護婦
刑事	
警官	

カメラマン

時代と場所

一九一〇年代、スミ子一〇代の頃から、一九
五〇年代半ばまでの、しんしゅう信州す諏訪と東京。

プロローグ

『諏訪郡歌』（作詞・岩本 節次／作曲・田村 幾作・）が低い音で流れている。

「富士赤石の二山系 並びて走るその中に

海拔三千有余尺 分水脊の一天地

高潔天下に比類なき 姿をうつす諏訪の湖

…」

舞台片隅が明るくなると、そこは上諏訪の停車場。黒紋付正装のスミ子がまるで行き場のない小鳥のように、ベンチへ腰掛けている。交響曲が郡歌に重なり、アナウンスが流れる。

アナウンサー 「天皇陛下が主催される戦後三度目の園遊会は、秋晴れの十一月八日、皇居お庭に各国大公使、各界功労者などを招いて開かれました。デニング英

国大使始め大公使、その婦人、」

舞台明るくなる。青のダンDRAMAN幕が張り巡らされ、大輪の菊が咲き誇っている。一九五〇年代半ば。秋の皇居、園遊会。

アナウンサー 「特に招かれた者として、皇族・旧皇族、各界功労者、女流作家の本郷スミ子さん」。

スミ子、呼ばれたように去る。

アナウンサー 「夏川薫さんら女性も交えて、午後一時頃から自動車は続々と二重橋を渡り男はモーニング、婦人は：」

カメラマン、アナウンスの途中から撮影場所をここと決めたように登場。

カメラマン（奥の招待客を誘導しながら）
ではどうぞこちらへ、菊が見事ですので、
ここでお写真を一枚。

本郷 スミ子と夏川薫が来る。

薫 幸福がへソを曲げた？

スミ子 餌を食べないんです。

薫 幸運の幸に福の神の福。今更ですが、ス
ミ子さんは面白い名前を九官鳥に付けま
したね。

スミ子 幸福は拗ねてたんです。

薫 スミ子さんが出かけるから？

スミ子 紋付でバレたんです。

薫 せっかくの園遊会です。へソ曲がりの九
官鳥はひとまず脇に…。

スミ子（立ち止まる）…。

薫 スミ子さん？

スミ子 薫さんに話すんじゃないかった。

薫 まあ。

スミ子　なんて情の薄い。

薫　スミ子さんが厚すぎます。読みましたよ、この前の『朝日』の記事。

スミ子　記事？

薫　「女流文壇の大御所、本郷スミ子さんの多忙な日常」。

スミ子　あああれ？

薫　午前二時まで執筆しても、朝の五時に九官鳥が起こすんですって？　寝られない

じゃありませんか。おまけにアヒルや鶏、犬や金魚までいるんですよ？

スミ子　金魚ではなくグッピーです。以前、お見せしました。

薫　（思い出して）ああ…。

スミ子　薫さんは関心が無いから。あの子達の話が、朝昼晩と二時間ずつかかります。

薫　生き物狂いも大概にしないと、また体を壊しますよ。

スミ子　薫さんだって寝不足でしょ。

薫 ええ、このところ、切が続いて…。

カメラマン (奥に) どうぞ皆様もこちらへ。

数人が登場し、記念写真を撮ろうとする。
もたもたと位置が決まらない。

アナウンサー 「中央の黄菊白菊に囲まれ

た大噴水の辺りは、まるで結婚式場のよ
うな華やかさ。今やガーデンパーティー
もたけなわ…」

やっと形が決まる。

カメラマン ではどうぞこちらをご覧ください。

スミ子 さあ皆さん三国一の笑顔で参り
ましょう。

一同笑う。シャッター音。

カメラマン ご希望があればお一人お一人…。

スミ子 頼みます。

カメラマン 畏まりました。

スミ子 (薫に) 遺影にしようかしら。

薫 遺影？

スミ子 紋付なんて滅多に着ません。

薫 縁起でもない、およしなさい。

カメラマン はい、参ります。

アナウンサー 「同一時十五分、君が代の

雅楽と共にモーニング姿の天皇陛下、皇
太子様、各宮様方がご出席。陛下はにこ
やかにご接待されたりお言葉を：

1 | 1

別の空間に明かり。都内の病院、六時頃。
ラジオから音声が聞こえる。医師の立花
が白衣を羽織っている。看護婦の大野が
入って来る。

大野 本郷さん、お着きになりました。

立花、ラジオを切る。ナレーションが終
わる。

立花　　すぐ行く。

大野　去る。

立花　　ったくあのときたら…。

立花　出て行く。

1 | 2

明るくなる。診察室。

スミ子、紋付の上に部屋着を重ねている。
少し離れて三吉。医師の立花が来る。

スミ子　　立花先生。

立花　　やはり入院してもらいます。

スミ子　　いいえ薬だけ下さい。

立花 検査の結果……。

スミ子 (立ち上がるようにして) 帰ります。

立花 帰ったら仕事をするでしょう。

スミ子 (やっと立って) め切があります。

立花 死にますよ。

スミ子 絶体絶命です。三吉、腕をかしなさ

い。

三吉 おいやめとけ。

立花 死んだら二度と書けません。

スミ子 なんて乱暴な。

立花 本郷さんの体を思って、言ってるん

です。

スミ子 ……。(腰を下ろす)

三吉 (痛快そうに) ほれ見ろ。

立花 (検査結果を見ながら) 血圧が高す

ぎる、お話になりません。もう一度聞き

ますが、具合が悪くなったのはいつで

す？

スミ子 ……五時頃だったかしら。皇居から車

に乗って、家いえに着いて鍵を開けて電気を

つけて……。

三吉 俺は、こいつが帰ったのも気付かなかった。

立花 ご親族ですか？

スミ子 いいえこの人は……。

三吉 中洲三吉。まあ客だな。

立花 客？

スミ子 (三吉に) 馬鹿なことを。(立花に)

大東亜戦争で焼け出されて一〇年、最近になって、行く所が無いと泣きついてきたんです。

三吉 今はこいつん家の隣に住んでる。

スミ子 私はブザーを鳴らしました。

立花 ブザー？

スミ子 一人暮らしですから、もしもの時に備えて、この人の住まいまでブザーをひいています。

三吉 俺は……いつものいたずらかと。

スミ子 「いたずら」とは何です。時々鳴らしてみるのは、あなたがちゃんと現れる

かを試験してるんです。

三吉 いったって用事なんぞ無いじゃないか。

立花 じゃあ…。

三吉 …放っておいた。

スミ子 恩知らず！

三吉 うるせえ。

立花 まあ本郷さん。（三吉に）それで？

三吉 六時頃、編集者が来た。様子が変だ

から鍵を開けてみるって。家に入ったら

書齋にこいつが倒れてた。

立花 よく見つけてくれました。

スミ子 この人のせいで、危うく死ぬところ

でした。

三吉 呼んでやっただろ、救急車を！

編集者の堀田ゆり、入って来る。

ゆり 本郷先生。

スミ子 （立花に）堀田さん。例の編集者で

す。

立花 先ほどご挨拶を。

スミ子 幸福の様子は？

ゆり 特に変わりはありません。

スミ子 ゲラは？

ゆり (封筒を出して) こちらに。

スミ子 私は血圧が高くてめまいがします。

熱もあるようです。

三吉 入院だとよ。

立花 一週間は安静が必要です。

ゆり 本郷先生。

スミ子 (原稿を改めながら) 仕方がない。

ゲラはここでチェックします。

立花 ここで？

スミ子 今夜は徹夜です。

ゆり でも先生……。

立花 待ちなさい。

スミ子 (立花に) 実は私も、今回ばかりは

入院が必要だと感じていました。

立花 じゃあ……。

ゆり 先生は病院に来てすぐ、ご自宅から
ゲラを持って来るようにと。
スミ子 自分の体は自分でわかります。
立花 徹夜なんてとんでもない。
スミ子 この作品は、私の半生を文芸雑誌で
連載したものです。校正は、一ヶ月前に
終わっているはずでした。
ゆり 出版は年明けを予定しています。
スミ子 絶体絶命。堀田さん、今夜はあなた
にも手伝ってもらいます。
三吉 俺は帰るぞ。
スミ子 待ちなさい。
三吉 なんだよ。
スミ子 (メモを渡しながら) 入院に必要な
ものです。明日、通いの女中に。
三吉 (受け取って) 美容クリーム、耳か
き。
スミ子 読まなくていい！
三吉 ちえ、使いつぱしりか。
スミ子 生き物の世話も頼みましたよ。私は

暫く帰れないんですから。幸福にもそう
伝えてください。

三吉 女のくせに、園遊会なんぞ出かける
からだ。

スミ子 呼ばれたから行ったんです。

三吉 女は家に居るもんだ。

スミ子 お黙り！

スミ子、近づこうとしてフラつく。

ゆり 先生危ない。

立花 お掛けなさい本郷さん！

三吉 こいつにはいい薬だ。

スミ子 三吉！

三吉、出て行く。入れ違いに看護婦の大
野が来る。

大野 先生、奥様からお電話です。

立花 本郷さんに点滴を：

大野 病室で準備しています。

大野 出て行く。

立花 本郷さん、病室に行って点滴を受け

てぐっすり眠りなさい。そして私を寝に
帰らせてください。（ゆりに）あなたも遠
慮しなさい、この方は病人ですよ。

立花 出て行く。

スミ子 さあ始めましょう。

ゆり でも少しお休みに…。

スミ子 心配無用。多少のことがあっても、
いざとなればここは病院、あなたに迷惑
はかかりません。（原稿を渡して）読んで
ください。私は聞きながら確認します。

ゆり …。

スミ子 もたもたしないで。

ゆり では冒頭の部分から始めます。（読み

始める）「私の生まれた町は起伏に富み、また湖が存在し、温泉も豊富に湧いている。富士赤石の二山系」と幼い頃から歌ったスワ：

スミ子 『諏訪郡歌』。長野県には各町に固有の楽曲、愛唱歌が存在します。父が商売で朝鮮に行った折も、この歌に励まされたと聞いています。

音楽が重なる。

「富士赤石の二山系 並びて走るその中に
海拔三千有余尺 分水脊の一天地
高潔天下に比類なき 姿をうつす諏訪の湖
：」

本郷八千代、源右衛門が出てくる。

スミ子 父の出発は確か一九一七年だったか
：。ともかく今から四〇年ほど前の話で

す。ロシアに革命が起きて、ソビエトが
政権の樹立を宣言した頃です。

「威風千古に凜として 国家を守る御名方」
の

神の恵みの波にあみ 茂りに茂る学び草

文武の道に競いつつ 後ろは見せぬ諏訪の

民